高砂町と北前船

江戸時代（1603－1867）の中頃、貨物船は瀬戸内海を起点に、本州と九州を隔てる関門海峡を通り、太平洋の強い潮流を避けて日本と韓国の間の海の沿岸を上る航路で大阪から北海道へ向かうようになりました。

明治時代（1868－1912）、この航路を通る北前船（北行きの船）の数は急速に増加しました。北前船は、関西から太平洋沿岸の江戸（現在の東京）へ生活必需品を運ぶ船とは異なり、往路も復路も物資を運びました。江戸行きの船が復路は何も積まずに帰るため収益がかぎられていたのに対し、北前船は多くの港に立ち寄り、収入を最大化しました。船の商人たちは、利益が出るものは何でも売り、掘り出し物と思われるものは何でも買い、次の寄港地で売りました。

高砂地域は北前船の発展に重要な役割を果たし、地域貿易の発展を促しました。高砂地域は瀬戸内海の播磨灘に面していたため、寄港地として重宝されました。北前船航路の起点である大坂へのアクセスも良いことから、多くの船主や商船員が高砂地域に住居を構えました。

そして高砂地域出身の実業家・工楽松右衛門（1741－1812）が発明した松右衛門帆は、当時の海運業に大きな影響を与えました。松右衛門帆は耐久性があり、それまで使われていた葦や軽い木綿で作られた帆よりもはるかに丈夫で柔軟だったため、帆船の信頼性と性能を大きく向上させました。

日本の国内貿易の発展に大きく貢献した高砂地域では、多くの建造物が日本文化遺産に認定されています。